

癒しを求めて

—トルコの「スピリチュアル」な人々—

真 殿 琴 子 *

死んだらどうなるの？

「最近、輪廻は合理的だと考えるようになった」と友人は告白してきた。「イスラームを学ぶあなたを混乱させないといいんだけど」という前置きつきの突然の告白に私は驚きつつも高揚した。出会った当初より彼女のことはトルコ女性文化協会（Türk Kadınlar Kültür Derneği）¹⁾ のブルサ支部のメンバーで、メッカへも 2 回行ったことがある比較的熱心なムスリマだと知っている。夫を亡くしてから臨死体験に興味をもつようになり、精神世界への扉が開かれたと語ってくれたことがある。スーフィズムへの傾倒もそのような流れの延長線上にあったと教えてくれた。そんな彼女の告白はコロナ禍を経て、彼女の長年にわたる“探求”に進展があったことを示していた。無論、輪廻はイスラームの教義に反することである。²⁾「あなたの国では人は死んだらどうなるの」という彼女の問いは

切実なものとして聞こえた。知る限りの日本人の死生観について話すと彼女は喜んでくれた。そして、最近視聴し始めたという YouTube のチャンネルをいくつか教えてくれた。そのことは彼女にとって“秘密”であった。彼女の属するコミュニティにおいて彼女たちが支援する「先生」³⁾ の存在は絶対であるからだ。コロナ禍での一番の変化はネット配信をとおして他の分野の先生の話聞き始めたこと、そしてこれまでの信念にも色々な形で疑いが生まれてきたこと、と話してくれた。また、彼女は同時にコロナワクチンや国際政治に関する陰謀論やメタバース、並行世界の存在に関心を抱いていた。そして興味深いことに、自我の把握できない想像や記憶の源泉である無意識やバーチャル空間、複数の世界線の存在について考えるうちにスーフィズムで説かれる多層的な「世界」（âlem）との関連性がみえてきたという。「息

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 1966 年に首都アンカラを拠点として、作家であり、ケナン・リファーイー（1950 年没）の教え子のひとり自身もスーフィーであったサーミハ・アイヴェルディ（1993 年没）によって創始された文化保護や教育推進などを目的とした慈善的団体。会員の多くは女性であり、アイヴェルディの教え子であり、同協会のイスタンブール支部のリーダーを務める女性作家でありスーフィー思想家／教育者であるジェマールヌル・サルグットの活動の支援者が大多数を占める。

2) 輪廻を肯定すると終末に復活して裁きを受ける際に、裁きの公正さが維持できないとしてイスラームの教義では基本的には否定されている [鎌田 2002: 1053]。

3) 1925 年以降、スーフィーたちの活動が公的に規制されているトルコでは Şeyh や Mürşit といったスーフィズムにおける“師匠”を彷彿とさせる呼称を公に自称／他称として用いる人はほとんどいない。その代わりに、多くは「先生」を意味する Hoca（一部では Üstad）を用いる。

子の VR ゴーグルを借りて目にした仮想現実
は不可視界 (gayb 'âlemi)⁴⁾ なんじゃないか
と思えた」と語る彼女の表情からは静かな興
奮が伝わってきた。

「スピリチュアル」な人々

近年トルコでは自己啓発やメンタルケアを
目的として瞑想やマインドフルネス、ヨガの
効果が広く受け入れられるようになり、多様
な「スピリチュアル」(トルコ語でも Spiritüel
が日本語の用法と同じように使われている)
な知識も知られ始めている。私が確認した限
りでは、レイキ (Reiki) やバイオエネルギー
(Bioenerji) と名前がついたもののほかには、
手かざし (直接あるいは遠隔) による痛みの
除去や所定の場所 (頭頂部や胸のあたり) を
繰り返し叩くことでトラウマ解消になると
いった民間療法が実際に行なわれているとの
ことであった。その他、蜂蜜やプロポリスな
どを用いる蜜蜂療法 (Apiterapi) や治癒の
石 (şifa taşı) と呼ばれる石を含むさまざ
まな天然石や鉱物の効果が注目されるなど、実
にさまざまな方法で人々が「癒し」を求めて
いることが分かった。それらは、トルコでも
イスラーム法に適した療法として普及してい
る瀉血 (hacamat) 等の伝統医療とは異な
り、必ずしも宗教的な正しさが問われるわけ
ではないようだった。その担い手が心理士
(psikolog) を名乗る例も散見され、そのよ
うな状況は日本におけるトランスパーソナル
心理学を取り巻く状況とパラレルな関係にあ

るようにみえた。しかし、日本のスピリチュ
アルブームと異なるのは、いくら世俗国家で
あるとはいえ、国民の大多数がムスリムであ
るという事実がこれらの言説の広まり方にも
緊張感を与えているという点である。癒しを
もたらすのは「治癒者」(şifa) ではなく、あ
くまでも神であるという見解は誰にとっても
確固たる理屈であった。また、ネット上に現
れる術者たちがどの肩書きを自称するかにつ
いては日本の同様の界限以上に注意が払われ
ているようにみえた。こういったトルコのス
ピリチュアル界限(「市場」といった方が的
確かもしれない)の急速な発達を、私は自分
のルームメイトの“探求”のうちにも見出
していた。

探求は続く

私と同年である彼女は、出会ったその日
にバイオエネルギーの存在について話してく
れた。「自分には霊的な力がある」という彼



写真1 とりなしを求めて聖者を訪れる人々 (ブ
ルサ、テズヴェレン・デデの墓廟)

4) クルアーンにおいて現象界の対義語として言及される、神が自身の下僕である人間にはみえないように隠し
た世界 ('âlam al-ghayb) のこと。

女の言葉は決して嘘ではないようにみえた。大学で心理学の学位を修めた彼女は立派なカウンセラーとして、そして友人としてよく話を聞いてくれ、渡航前に何度か個人的に「セッション」(seans)を受けさせてもらった。そのセッションではカウンセリングと瞑想がセットで、瞑想中は彼女が遠隔でエネルギーを送りながら、「チャクラ調整」(çakra dengeleme) や「無意識の浄化」(bilinçaltı temizliği) などの施術をしてくれた。術後は喉が渇いたり眠気に襲われたり、全体の施術後のような身軽さを感じたりもした。それから2021年秋イスタンブルへ渡り、彼女と同居を始めてから彼女がどんな方法論を用いていたのかを知った。彼女は、大学で学んだ心理学の知識とシータ・ヒーリング(Theta Healing) —友人やその周りの人は皆それを「テタ」(Teta)と呼んでいた—というテクニックを併用しながら、独立した心理士／治療者としてトルコ国内・国外問わず、友人の紹介をつうじて繋がった相談者(danışan)たちを受けもっていたのだ。

彼女が主な手法として採用していたシータ・ヒーリングとは瞑想のテクニックのひとつであり、創始者は Vianna Stibal というアメリカを拠点とする女性である。彼女の著作は日本語でも何冊か翻訳されている。文字数の関係上、このテクニックがいかなるものであるかという説明は割愛するが、術者になるためにはその専門的知識を科目(いずれもトルコ語に翻訳された教科書が存在する)ごと

に修了する必要がある、トルコでもイスタンブルなど都市部を中心にアカデミーが増え始めているとのことだった。友人曰く、彼女の「テタ」の先生(女性の術師)は元タイブン・アラビー思想に詳しい神学者(ilahiyatçı)でイスラームの教義には大変深く通底しているとのことであった。友人は先生の受け売りで「預言者スレイマンは動物と話すことができた、彼が人類で初めてのテタの使い手である」、従って「テタ」はイスラームの教義の外にあるものではなく、名前がつく前からこの世に存在していたと度々強調した。また、その教えのうちにある“前世からの影響”という要素は“先祖たち(atalar)からの影響”と置き換えられていることも確認した。先祖の経験が現代を生きる我々の無意識下に刻まれ、身に覚えのない固定観念の原因となっているのだそう。ある日「テタ」によって友人の先祖に古代ギリシアの哲学者や黒海沿岸の魔女がいることが判明するなど、冗談抜きで「テタ」をつうじて「創造主」(Yaradan)⁵⁾がそれをみせたとして、彼女の無意識に眠るあらゆる“真実”が明るみになった。私は「カルマ」の仕組みと何が違うのかと疑問に思いながらも、彼女の気づきには同意も否定もしなかった。「テタ」とスーフィズムの共通点があるとすれば、師弟関係を絶対とする教育体制(それもビジネスの手法であるようにみえた)くらいで、そのほかに挙げるとすれば、友人も彼女の先生もイブン・アラビーの文字論を数秘術のレファレン

5) なぜか「アッラー」とは呼ばない。シータ・ヒーリングの術者同士の会話には英語から翻訳された専門用語とアフメーションの効果を取り入れた独特の話し方が共通してみられた。

スとして扱っていたのは興味をひいた。「テタ」自体は科学を模倣した擬似医療であるようにみえた。しかし、友人の霊的な施術に救われたかつての自分の存在も事実であった。

トルコでの滞在が3ヵ月を過ぎる頃には私はブルサへ移り、その期間はルームメイトの状況を詳しく聞くことはなかった。再び彼女を尋ねた時には「テタ」を辞めたことを告げられた。先生への不信感からそのように決心したとのことであった。これからどうするのか尋ねる私に対して彼女は「次は量子力学(Kuantum)の先生からセッションを受けてみるつもり」と返した。そして『量子力学・スーフィズム』[Tuncay 2019]というタイトルの本を勧められた。ここから先は正直私には手に負えないと思ったが、誰にとっても“探求”は続いていると感じた瞬間であった。



写真2 タスビーフ(数珠)を用いてダウジングを行なう友人

引用文献

- 鎌田 繁. 2002. 「輪廻」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 1053-1054.
Tuncay, Yalçın. 2019. *Kuantum Tasavvuf*. Istanbul: Az Kitap.

場所を与えられる、持つということ

—福岡市・天神でのフィールドワークを通して—

北 條 七 彩 *

安直な入り口

「屋台の研究をしているんです」と伝えると、大概の人に面白がられた。23歳の大学院生が、屋台の一席に陣取り、2021年10

月11日から12月19日までの70日間、福岡県天神でフィールドワークを実施したのである。筆者は都市や公共空間、場所の利用について関心があった。「アフリカ地域研究専

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科